

保育所における1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を 身体表現として描き出す試み

名和 孝浩* 田村 佳世* 鈴木 裕子**

*大学院学生

**幼児教育講座

The Physical Expression of “Refusing, Demanding, and Coordinating” Actions of 1- to 2-Year-Old Day Nursery Children

Takahiro NAWA*, Kayo TAMURA* and Yuko SUZUKI**

**Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

***Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

In this study, we examined the characteristics of the “refusing, demanding, and coordinating” actions of 1 to 2-year-old day nursery children as physical expressions, and developed criteria to be used for such an analysis. We first implemented an observational survey that focused on scenes in which 1- to 2-year-olds (13 subjects) refused nursery workers’ requests. The results revealed a strong tendency for “refusing” actions to be expressed with movements, but no words, and for these actions to be part of a series “refusing, demanding, and coordinating” series. The results also suggested that the analysis of such movements based on the four elements, energy, time, space, and body form, might be possible. The perspectives and criteria for each of these elements were examined before use in observational case studies. This study confirmed the efficacy of analyzing the target children’s movements using these perspectives and established that these movements are expressions of internal intention.

I. 問題の所在と目的

保育所での乳児保育(0, 1, 2歳児クラス)^{註1)}の実践のなかでは、乳児が保育者に対して、ことば以外の行為で、積極的に自分の思いを訴えかけていると感じる場面に遭遇する。そのような場面での身体の動きは、一瞬の出来事であったり、明らかに何らかの意図を伝えようとしたりするものなど様々であるが、それに保育者が応えようとする中で、かかわりが生まれ、そのやりとりのなかで関係が育くまれている。

昨今、子どものコミュニケーション能力の不足¹⁾が言われるが、乳児は、他者とのかかわりにおいて、ことば以外の行為によって多様で豊かな表現をしている。またコミュニケーションの育ちは、新生児期において、養育する身近なおとなのかかわりによって既に始まっている²⁾。相手の解釈に支えられながら、自分の意図を伝えようとするのが、乳児のコミュニケーションの芽生えと捉えられる。このようにコミュニケーション能力が、乳児期から積み重ねられていることは自明であり、ことばがコミュニケーション手段の

主体にならない時期からの保育者とのかかわりは重要な意味をもつ。

一方、保育者は乳児とかかわる際、行為の受け手として、その子どもの行為の意味を解釈しながら応答しようとする。それは、ことばで自分の思いを伝えられない乳児が、ことば以外の行為で内面を語っており、保育者は、その行為から内面を推し量り、表情から読み取り、精神世界を感じ取ることが³⁾、コミュニケーションをとるために必要だからである。しかし、すべてにおいて、行為からその意味をスムーズに感じ取れるわけではない。ことばが伴わないため、何を訴え、何を求めているかを、保育者が上手く掴めず対応に困るといった悩みも聞かれる。特に乳児の拒否する場面などは、対応に困る場面として挙げられ、拒否をしていることは理解できても、何をどうしてほしいのかが読み取りにくいと言う声を聞く。

このような悩みの背景には、保育者の乳児の理解が感覚的なものに支えられており、経験により「何となくそのように応答している」といった範囲を脱し切れていないという課題があると考えられる。それは乳児

保育場面での研究の蓄積が充分ではないことに由来するだろう。社会状況の推移と共に、近年ニーズが高まり続ける乳児保育の質を充実させるためにも、乳児保育の実践場面で、乳児が保育者とのかかわりをどのように行っているのかを捉える必要がある。特に保育者が、いかに乳児のことば以外の行為から思いを読み取り、応答的にかかわっていくか、日常生活のなかに表れる身体の動きを、コミュニケーションとしてどのように捉えていくかを考えることが課題と考えられた。

そこでこれまでに、筆者らは、乳児の保育者とのかかわりを捉える一端として、1歳児の「自分を見てもらうための行為」に着目し、ことば以外のどのような身体的な動きで、自ら保育者との一対一の関係に入るのかを検討した⁴。その結果、観察期間中に収集できた34種類の行為が、自分を見てもらいたい相手を「見る」行為、見てもらいたい相手との距離を縮めるために相手に「寄る」行為、自分を見てもらいたい相手に見せたい状況を「示す」行為、自分の気持ちを伝えるために意識的に「表情をつくる」行為の、4つのカテゴリーに分類された。1歳児が、自分の思いに合わせて身体の動きを使い分け、自分の意図を保育者にアピールしていることが明らかとなり、それらの行為が保育者とのかかわりの芽生えとして捉えられた。また、保育者とのかかわりにおける身体の動きを、内的な心理状態の表現として捉えることで、乳児が保育者に対して何を伝えようとしているのか、保育者との関係をどのように形成していくのかを捉えることができる可能性が示唆された。しかし、この研究では、行為を分類し、主とした意図をある程度明らかにできたが、保育者が乳児の思いを感覚的なもの以外で捉えるためには、さらに、保育者間で共通理解できるような何らかの基準に依拠して身体の動きを捉える必要があると考えられた。

そこで本稿では、保育者が乳児の思いを感覚的なものを超えて捉えるために、保育者とのかかわり場面における乳児、特に1-2歳児の身体の動きを、身体表現として描き出すことを試みる。乳児保育を中心とした諸研究における分析上の特徴や課題を整理し、1-2歳児の身体の動きを身体表現として描き出すための観点や基準を作成し、その有効性を検討する。

II. 乳児の動きを身体表現として捉えるとは

乳児の身体の動きは、保育者とのかかわりの際にどのように捉えられるのだろうか。たとえば、すべり台でそばにいる保育者がその乳児をすべり台に上げて、そこから滑り降ろさせてあげたところ、滑り終わったその乳児は、下に降りると、もう一度というように両手を差し出す。その行為に応じて、同じように乳児をすべり台の上方に乗せると滑り降り、満足そうにその

行為を繰り返す。これは、その乳児が、すべり台から滑り降りたいという意志を、「両手をあげてその保育者を見る」という動きを用いて、身体で表現している⁵。このようなエピソードから、ことばによるコミュニケーションが中心でない乳児も、身体によって自分の思いを表現していると考えられる。

では、乳児の身体の動きは、相手に思いが伝わるようにすべて意図的に表現されたものなのだろうか。柴⁶は、無意識的な身体表現を表出、意識的な身体表現を狭義の身体表現としているが、意識的・無意識的なものを含んだ、まるごとのからだの活動を広義の身体表現と定義し、他者の身体から心の状態を読み取っているとしている。また幼児の表現を分析するにあたり、幼児が意識しているか、無意識であるかは特定が困難として、高野⁷は、4~35か月児の欲求場面における母子間のコミュニケーションの分析において、現象として母親が気づいたすべての身体による表現を、身体表現として捉えている。また石塚⁸は、からだの動きはそのまま精神の動きであるとし、ことばによる表現や意味のある行動による表現だけでなく、ことば以前の音や表面に表される以前の、行動とも言えないような動きまでも含む、表現の一切まるごとを、「身体表現」と想定している。保育者とのかかわりにおける乳児の身体の些細な動きも、内的な心理状態の表れとしての身体表現と捉えることで、実際に身体的な動きで、どのようにコミュニケーションをしているかを探ることができると考えられる。よって本研究では、現象として表れたすべての身体の動きを、内的な心理状態の表れとしての身体表現として定義して捉えることにする。

では、1-2歳児の保育者とのかかわりを、身体表現と捉えた場合、どのように分析ができるだろうか。

本研究では、主にラバン身体動作表現理論（以降ラバン理論と称する）を援用する。ラバン理論とは、Rudolf von Laban (1879-1958)を中心とするドイツ表現主義舞踊の創作者らが1920~40年代に構築した、心理状態と身体運動の相関関係を規定する理論⁹であり、身体の運動を、身体のどの部位が動くのか、空間のどの方向へ動きが発揮されるのか、どのような速度で動きが進行するか、どの程度の筋肉エネルギーが消費されるかの4つの質問に答えることで決定し記述できる¹⁰とし、身体表現を数量的に分析する際に用いられている^{11 12 13}。

さらにラバン理論は、様々な運動を網羅できる点と数理的明確性から、人間とロボットのコミュニケーションを目的としたヒューマンフォームロボットの身体動作分析に利用されている^{14 15}。これはロボットの身体動作に、人間らしい適切な感情を表出させることを目的としているが、逆に言えば、コミュニケーション場面における人間の身体動作は、ラバン理論に基づ

いて分析が可能であるということである。ラバン理論に基づいて、乳児の身体表現を分析することは、その特徴を捉えるために有効であると考えられる。

また乳幼児期の身体表現によるコミュニケーションの研究では、高野^{16,17}が、母親に対して行ったアンケート調査から、母子間のコミュニケーションにおける身体表現を、ラバン理論の動きの視点を基に、身体部位、動作、ダイナミクス、空間性、関係、言葉、特になし（表現しない）の7カテゴリーから分析し、母親が子どもの表現をどのように理解しているかを明らかにした。しかし、これは母親へのアンケートの質的な分析に用いられており、実際の観察場面から、乳児の保育者とのかかわりにおける身体表現を捉えた研究は見当たらない。そのため、乳児の身体表現を描き出すために有効な分析の観点を検討する必要がある。

Ⅲ. 乳児の行為を身体表現として捉えるための場の設定と分析の課題

Ⅲ-1. 「拒否」行為を焦点とする意義

本研究において、乳児の身体表現を捉えるためには、どのような場面に焦点を当てることが有効だろうか。

乳児は、1歳半ごろから2歳にかけ、保育者の提案や要求に対し、何かにつけて「イヤ」「ダメ」などの拒否のことばを連発するようになる。この時期の乳児は、保育者の提案や要求を拒否することで、保育者とは違う自分「われ」を主張するようになり¹⁸、様々な手段を用いて、保育者の促しや要求を拒否したりするなど、能動的に自分の思いを伝えようとする主体として、コミュニケーションに関与し始める¹⁹。また、このような「イヤ」「ダメ」ということばは、それまでの保育者の要求を聞き入れる、という関係から、自分で判断したいという、自分なりの心の世界が意識化されてきた証であると考えられるため、自我の芽生えとしての自己主張²⁰として、育ちの一つとして捉えられている。今井²¹は、「もう赤ちゃんじゃないんだから」「いちいち命令しないで」「自分で決めたいの」と訴えたい思いが「イヤ」「ダメ」という一語文で表現されているとしている。「イヤ」「ダメ」ということばには、確かにそのような思いが表現されていると考えられ、また拒否する行為において、象徴的なことばであるとも考えられる。しかし、そうしたことばが、保育者との交渉や駆け引きの中心となるものであるのだろうか。内的な心理状態の表れを捉えるためには、乳児の身体の動きに着目する必要があるのではないだろうか。

坂上²²は、母子葛藤場面における自己主張や反抗を取り上げ、乳児の拒否や要求といった行為は、それを受け止める養育者（親、保育者）の存在抜きには説明し得ないとしている。乳児の拒否や要求と言った場面

は、乳児と保育者が、互いに相手の意図や思いを読み取りつつ、自分の意図や思いを伝えようとする、積極的な交渉の場面として捉えられる。特に、1-2歳児は自己主張や反抗が増えるため扱いにくく²³、その行為に対し、保育者が注意や制止をしたり、それとは逆に、気持ちをくむ言葉かけや、物的欲求を満たそうとする²⁴といった多様なかかわりが起こるため、拒否する行為などの乳児と保育者が対立する場面は、乳児と保育者の駆け引きが盛んになるとしている²⁵。そのため、この時期の拒否する場面に焦点を当てることは、保育者とのかかわりの芽生えとして、積極的に自分の内的心理状態を表そうとする乳児の様子や、より豊かになる相互交渉の検討が可能であると考えられる。

また、乳児が自らの思いを伝えようとして、保育者の要求を拒否する場面を検討する際は、かかわり手である保育者の応答を含めて検討する必要がある。河原²⁶は、1-2歳児の拒否行動について、これまでの研究では、子どもの拒否行動の生起率やその直前の保育者の行動には着目しているものの、拒否行動の相互交渉の経過や結末など、意味のあるひとまとまりとして、どのような相互交渉があるのかについては十分に検討がなされていないと批判し、拒否行動が起こりやすい、食事場面に焦点を当て、1-2歳児における拒否行動と保育者の対応の相互交渉パターンを明らかにした。しかし、食事場面とその他の場面では、状況や思いを伝える手段に、当然違いが出ると考えられる。乳児と保育者が相互交渉を行う拒否の場面において、日常生活のなかで、乳児がどのような行為として表わすのか、保育者がどのように応答するのかを、より多くの場面から捉えることが必要である。

さらに、拒否の場面での「イヤ」「ダメ」といったことばに、保育者はイライラしがちであり、自分の思いが強く、容易に気持ちが切り替わらない²⁷拒否の場面に、保育者が苦慮していることがうかがえ、このような場面に焦点を当てることは、保育の質の向上にもつながると考えられる。

Ⅲ-2. 乳児の拒否する行為から保育者とのかかわりを捉えた調査の概要と課題

本節では、保育所における1-2歳児の拒否する行為に焦点を当て、身体的な行為でどのように保育者とかかわっているのかを捉えた筆者らの先行調査の概要を示す。

本研究は、岐阜県A市内の私立保育園で、2013年10月23日～2013年12月18日までの期間、午前8時半から午後1時前後の、登園から午睡までの時間で、1週間に1回、参与観察を行った。対象は、0, 1歳児混合クラスの1歳児13名（男児：4名、女児：9名）を対象とした。保育者は、0, 1歳児クラス担当の保育者6名を対象とし、保育者の要求を対象児が拒否する場面を観

察し、69事例が収集された。

結果は、以下の5つの点にまとめられた。

(1) 拒否する行為の様態 (表1)

表1 拒否する行為の様態

様態	頻度
動作	36
動作→ことば	11
動作+ことば	8
動作+泣き	7
ことば→動作	2
動作→泣き	1
泣き→動作	1
泣き	3

拒否する行為がどのような様態で現れるかを分析し、「動作」「ことば」「泣き」の3種類で捉えられることが分かった。「ことば」には、発話のほか、喃語なども含めた。表1のように、8つの様態に分けられ、保育者に対し、「ことば」を用いず、身体の「動作」のみで拒否をする様態が36例と多く認められた。

(2) 拒否する行為が発現した場面と頻度 (表2)

表2 拒否する行為が起きた場面と頻度

場面	頻度
生活場面	22
遊び場面	1
遊び場面→生活場面	31
生活場面→生活場面	9
生活場面→遊び場面	3
遊び場面→遊び場面	3

拒否する行為が発現した場面は、「食事」「着替え」など生活に関する活動の「生活場面」、「戸外遊び」や「室内遊び」などの遊びに関する活動の「遊び場面」に分類された。生活場面中に22事例、遊び場面から生活場面への移行に31事例で、拒否する行為が多く発現することが認められた。生活場面に多く発現する理由としては、保育者が1-2歳児に身につけさせたい生活習慣や、生活上のきまりなど、その場での変更が難しい内容を、1-2歳児に要求することが原因となっていると考えられる。また、遊び場面から生活場面への移行については、遊びを中断もしくは終了することになるため、保育者の働きかけに対して、拒否する行為が多く発現すると考えられた。

(3) 拒否する行為が起きた直前の事象 (図1)

乳児の内面の読み取りとして、何に対して拒否が起きているのかを見るために、拒否する行為の直前の事象を分類した。その結果、「保育者のその子どもに対する指示」「保育者の注視の移行及び休止」「保育者のそ

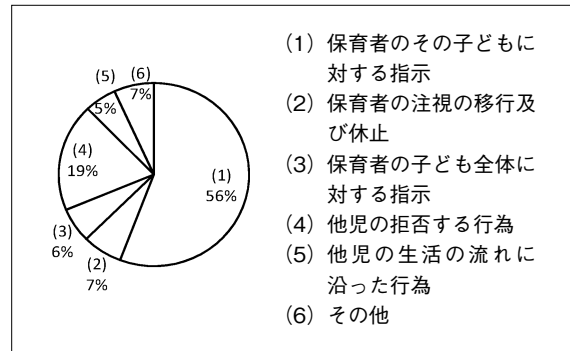


図1 拒否する行為が起きた直前の事象の頻度

の子どもを含めた全体に対する指示」「他児の拒否する行為」「他児の生活の流れに沿った行為」の5つに分けられた。

「保育者のその子どもに対する指示」は、保育者が特定の子どもに対して直接言葉かけや援助をしたことで拒否する行為が起きた場合とし、56% (82事例) と、約半数の拒否が保育者の直接的な指示で起きていることが認められた。「保育者の注視の移行及び休止」は、保育者がそれまで注視していた子どもから目を離す、もしくは他の子どもに視線を移したことで、拒否する行為が起きた場合とした。「保育者のその子どもを含めた全体に対する指示」は、保育者がクラス全体に向けて言葉かけや援助をすることで、拒否する行為が起きた場合とした。また、「他児の拒否する行為」は、他児の拒否する行為に刺激されて拒否する行為が起きた場合とし、19% (28事例) と多く認められた。「他児の生活の流れに沿った行為」は、逆に、他児の生活の流れに沿った行為に刺激されて拒否する行為が起きた場合とした。

(4) 拒否する行為の動き (表3)

表3 拒否する行為と動きの要素

拒否する行為を抽出した事例	拒否する行為の様態	動作のみ			
戸外へ出る前に、A子がテラスに座り、靴を履こうとするが、つま先から先が入らない。保育者Hが、A子の前に来て座わり、「靴履こっか」と言い、A子に向けて手を差し出すと、A子は座ったまま、靴をつま先から外し、自分の胸の前でぎゅっと抱える。	拒否する行為が起きた場面	生活場面			
	直前の事象	保育者のその子どもに対する指示			
	行為	部位	力性	空間性	時性
	対象を胸の前で抱える	上肢	強い	移動無し	くり返し無し

拒否する行為の身体の動きは、ラバン理論を基にした運動の成立要因である「力性」「空間性」「時性」「身体の形態 (部位、動き)」²⁸という観点から分類した。「力性 (ENERGY)」とは、動きの強さを示す。「強い、弱い」「重い、軽い」を区分した。「空間性 (SPACE)」とは、身体の動きを基にした広さや方向や高さを示す。ここでは、「移動の有無」を観点とした。「時性 (TIME)」とは、動きの速度やその組み合わせを示す。

ここでは、くり返しの有無に着目した。くり返しとは、動きの強弱長短が時間的なひとまとまりとなって2度以上行われることを示し、「時性」とも深く関る。

分析の手続きの一例を表3に示す。この事例からは、拒否する行為の身体の動きとして、「対象を胸の前で掴む」を抽出した。使用された「身体部位」は上肢、「力性」は強い、「空間性」は移動無し、「時性」はくり返し無し、となった。すべての事例について、このような分析を行い、拒否する行為の身体の動きを考察した。

(5) 拒否する行為の直前の事象から見た動きの特徴

5つの直前の事象との関連を基に拒否する行為の身体の動きを考察した結果は、以下のようにまとめられた。

「身体の部位」では、「保育者のその子どもに対する指示」によって引き起こされた拒否の動きにおいて、上肢26例が最も多く見られた。これは、表3事例のようなモノを抱える行為や、目の前の保育者を払いのける動きが多く表れたことによる。次いで、直前の事象5種類のすべてで、指示された相手やその場所から離れるという動きが共通して見られ、また「他児の拒否する行為」に関しては「他児に近寄る」行為も見られたために、下肢を使う場合が多く捉えられた。

「力性」では、保育者の直接的な指示に対しては、動きが強くなる傾向が見られた。一方、他児の拒否する行為に関しては、弱いという動きでの拒否が15例と見られた。これは、直前に起きた他児の強い動きに対して、その子どもに追従するという行為に及ぶために、結果として弱い動きになる傾向が捉えられた。

動きの「空間性」との関連では、目の前の保育者に対しての拒否では、その場から離れないで拒否する「移動無し」と、その保育者から離れる「移動有り」が、ほぼ同数程度見られた。また、「保育者の注視の移行と休止」のなかでは、保育者の注視がなくなったために、「見てもらえそうな場へ移動して、拒否する自分を見てもらう：移動有り」と、「見てもらえないならやりたくないから離れる：移動有り」という、相反する行為が見られた。

動きの「時性」との関連では、ほとんどの事象で、動きをくり返す様子は見られなかった。しかしなかには、タッタ・タッタという足運びで、保育者の様子をつかいがいながら離れるといった行為が観察され、このような拒否の動きは、一種の遊戯性と考えられた。1-2歳児でも、このような意図を持った行為の発現が見られた。

(6) 課題

本調査では、拒否する場面を焦点とし、そこに発現する動きを、身体の部位、力性、空間性、時性という観点から分析することによって、1-2歳児が身体の動きで保育者とかかわる様相を捉えられることが確認さ

れた。

一方、拒否する場面での身体の動きには、拒否とは逆に、保育者に対して要求していると捉えられる動きも確認された。これは、拒否と要求行動は表裏一体ともいべき非常に密接な関連をもち、両者の区別は便宜的なものにすぎず、何かを要求することは転じて現状では不満であること、つまり現状の拒否や否定を表すことになるからである²⁹。1-2歳児の拒否する場面で保育者が対応に悩む理由についても、拒否と要求が入り混じる状態になることが、読み取りにくさを生む要因の一つとして考えられる。さらに、拒否する場面の始まりから結末までを、ひとまとまりとして捉えた場合、どのような形であれ、1-2歳児と保育者とのやりとりは一応の決着がつくことになる。それを調整の場面と捉えることで、どのように調整に至ったかという見方から、拒否の内容や思いを、遡って検討できると考えられた。そのため、本研究では、保育者とのかわりにおける乳児の豊かな身体表現を捉えるために、拒否する場面が多く発現すると考えられる1-2歳児が、保育者の要求や自分の置かれた状況を拒否し、最終的に調整に至るまでの場面に焦点を当てるのが有効なのではないかと考えられた。したがって、今後の研究として、「拒否・要求・調整」の行為として捉えることが必要になった。

また、本調査では観察のみによる事例記述であったために、動きの詳細な分析をするための記録が不十分であった。ビデオ撮影を用いた分析の必要性という研究方法上の問題点も認められた。それによって、動きの分析が拡がると考えられるが、そのためには、動きを身体表現として分析するための観点や基準の設定が次の課題として挙げられた。

IV. 「拒否・要求・調整」行為を身体表現という視点から描き出すための分析シートの作成

本章では、分析のためのシートを作成することを目的として、1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を捉えるための観点と基準を検討する。

IV-1. 分析シートの観点と基準

(1) 直前に起きた事象

直前の行為は、先行調査によって「保育者のその子どもに対する指示」「保育者の注視の移行及び休止」「保育者のその子どもを含めた全体に対する指示」「他児の拒否する行為」「他児の生活の流れに沿った行為」の5つに分けられた。さらに、内面の読み取りとして、何に対して拒否が起きているのかを捉えるために「拒否・要求・調整の直前に起きた事象」という観点を設けた。1-2歳児の内的な心理状態は外から観察できな

いため、本研究では、目に見える1-2歳児の身体の動きに着目している。それと同じ理由で、何に対して拒否が起きているのかは観察できないが、目に見える「拒否・要求・調整の直前に起きた事象」を捉えることで、少なくともその身体の動きが発現した直接的な原因が探る手掛かりになるのではないかと考えた。

(2) 身体の形態：身体の動きと身体部位

記述した事例に基づき、身体の動きを区分して示した後、その運動のために用いた身体部位を記述した。身体部位の基礎区分は、頭、肩、肘、手首、指、軀幹、尻、膝、足首、足、爪先によって分けられる³⁰。本研究では、これを基にしながら、1-2歳児が動かす身体部位を、頭、肩、肘、上肢、指、胸、腹、背中、体幹、膝、下肢、に区分した。観察された1-2歳児の身体部位の特徴として、上肢や下肢が短く、それほど器用に動かすこともできないためか、膝・足首・爪先などが一体化して動くことが多かった。そのため、腕全体が動いた場合を上肢、脚全体が動いた場合を下肢、上半身を含む胴全体が動いた場合を体幹とまとめた方が、動きを表すのに適していると考えられた。

(3) 力性

力性は、動きの強-弱を5段階で数値化し、動きが強くなる程数値を大きく、弱くなる程小さくした。先行調査では「強い」「弱い」の2段階であり、それ以上の分析はできなかったが、ビデオの映像を用いることで、細分化して捉えられるようにした。

(4) 空間性

空間性は、「移動の有無」「移動の経路」「保育者との向き」「姿勢の前後の重心」と「姿勢の左右の重心」「姿勢の高さ」の観点を設けた。

「移動の有無」は先行調査と同様だが、それに「移動の経路」を加え、直線的か曲線的かを示すことで移動の仕方を確認できるようにした。拒否の場面において、対面で思いを伝えようとする場面や、背を向けて逃げるように離れる場面が観察された。相対している時と離れる時では、動きや意図が変化するものと考えられ、「保育者の向き」を観点に加えて分析した。また、先行調査で抽出された行為のなかには、自分の重心を後ろ寄りにすることで、保育者に連れて行かれないようにするなど、重心を意図的に変える動きが目立った。その程度や向きを分析することで、どのような意図が身体の動きに表れているかを掴む観点の一つになると考えられた。「姿勢の左右の重心」は、Cを中心、大きく右寄りがRR、右R、大きく左寄りがLL、左寄りがL寄りで示した。「姿勢の高さ」については、先行調査で「身を屈めて離れる」「這いながら離れる」などの姿勢の高さを意図的に変える行為が抽出された。姿勢の高さは、対象児の意図を読み取る上で、必要な観点と考えられた。うつ伏せや仰向けの状態を指す方位：1、順に座位：2、膝位：3、立位：4、伸長位：5

の5段階に分けた。

(5) 時性

先行調査で示唆された、行為の意図としての「遊戯性」を示す可能性のある「くり返し」を、ビデオカメラを用いて捉えられるようにした。「動きの速さ」は、5段階で数値化する。「動きの頻度」は「くり返し」といったリズムのあるまとまった動きの他に、「単発」「連続」「持続」を調べることで、「くり返し」の観点だけでは捉えられなかった「より強い拒否の動き」なども捉えることができると考えた。「単発」はその動きが一度起きて終わった場合、「連続」は同じ動きが2回以上連続して起きた場合、「持続」はその動きを一度して、そのまま保持した場合とした。

(6) 拒否・要求・調整の区分

先行調査では、拒否する場面において、拒否的な身体の動きと、要求的な身体の動きが同時に表れており、それが読み取りにくさにつながるのではないかと考えられた。そのため、1-2歳児の身体の動きが拒否的なのか、それとも要求的なのかを、便宜的にでも区分することで、心理状態がつかめるのではないかと考えられた。そこで分析シートでは、「拒否：拒否的な身体の動き」「要求：要求的な身体の動き」「拒否と要求：拒否的と要求的の両方と捉えられる身体の動き」に区分した。またどのように調整に至ったかを見ることで、拒否の内容や思いを、遡って検討できると考えられたため、「調整：調整的な身体の動き」を設けた。

V. 分析シートの試行

V-1. 事例収集

岐阜県B市内の私立保育園1歳児クラス（1歳児19名、保育士4名）を対象とし、2014年5月13日より、9時から12時半頃までの登園から給食までの場面で、週に1回程度、参与観察を行った。観察期間は現在も継続中である。観察は筆記による記述とともにビデオ撮影を行い、観察終了後、逐語的に記録した。ビデオ撮影は、基本的に三脚を用いて定点的に使用した。

V-2. 分析シートを基にした分析考察

ここでは、同一児（男児KS）の2事例を対象として、分析シートを用いた分析考察をする。

(1) 事例1：抱っこしてよ

分析シート（シート1）

事例1は男児KSが、朝の会中にピアノの隣に置いてあるマットに乗るが、それを保育者に止められることで起きた拒否の場面である。この事例から、①マットに乗る、②保育者の脚に抱きつく、③保育者に向けて両腕を挙げる、④保育者の膝から下りる、という4つの行為が抽出され、シート中に示すように、男児KSの要求・拒否・調整の状況と内面が考察された。分析

シート1

事例1 「マットに乗れないなら抱っこしてよ」 男児KS 場面:朝の会 2014.06.03														
朝の会で保育者や子どもが歌を歌っている時に、男児KSは、ピアノの隣に置いてある、少し高いマットの上に乗って、ピアノを覗き込んでいる。C先生が近寄り、「下りるよ」と言葉をかけながら、KSの腕を抱えて床に下ろす。C先生がその場から背を向けて離れると、①KSは、またすぐにマットに乗る。そのままピアノに掴まりながらつま先で立つと、ピアノではなく子どもや保育者がいる方を見ている。そこへ、他児を抱いているA先生が近寄ってくる。KSはピアノに掴まりながら、お尻を振って体をくねくねさせている。KSをマットから下ろすために、A先生がKSの腕を掴もうとした瞬間、②KSは、A先生の脚に両腕で抱きつく。A先生は、自分の脚に抱きついたKSの腕の下に手をまわして抱え、ピアノから離れてから、KSを床に下ろす。A先生はしゃがんで、それまで抱いていた他児も下ろすと立ち上がり、歌に合わせて踊ろうとする。③KSがA先生に向けて両手を挙げる。A先生がしゃがみ、KSの背中に手をまわすと、KSはA先生の首につかまって、膝に登るので、A先生はKSのお尻に手を当ててしゃがんだまま抱いている。他児が朝の会の歌の流れで「王様ポーズ」ととっている、A先生の方は向かず、他児の方を見ながら、自分のおでこに手を当て、そのままA先生の方を見ずに膝から下りる。														
時間	直前に起きた事象	身体の形態		力性		空間性				時性			拒否・要求・調整の区分	
		動き	部位	強度	移動の有無	移動の経路	保育者との向き	姿勢の重心(前後)	姿勢の重心(左右)	姿勢の高さ	くり返しの有無	動きの速さ		動きの頻度
00:07-00:14	保育者がマットからKSを下ろす	①マットに乗る	下肢	4	有	直線的	保育者の背後	3	C	4	無	3	単発	拒否
00:23-00:40	保育者がKSの腕を掴む	②保育者の膝に抱きつく	上肢	5	無	無	対面	2	C	4	無	4	持続	拒否
00:45-01:06	保育者がKSを下ろして立ち上がる	③保育者に向けて両腕を挙げる	上肢	4	有	直線的	対面	2	C	5	無	3	単発	要求
01:13-01:22	他児が歌に合わせてポーズをとる	④保育者の膝から下りる	下肢	2	有	直線的	保育者の右側	3	R	4	無	2	単発	調整(保育者にとって)
考察	<p>①マットに乗るは、もともとKSが朝の会中にマットに乗っており、それをC先生が下ろしたことによって起きた身体の動きであった。直前に起きた事象の「C先生がKSをマットから下ろす」行為に対し、KSの「マットに乗りたい」という欲求が、C先生の「マットから下りてほしい」という要求に対する拒否として表れたと捉えられた。C先生は、KSをマットに下ろした後、KSに対して背を向けて離れるように動いている。そのため、KSが①マットに乗った時の「保育者との向き」は保育者の背後であり、また「移動の経路」はマットへ向かって真っ直ぐに移動していると捉えられた。これらの動きの詳細から、KSは保育者の「マットから下りてほしい」という要求を理解しているため、保育者に見つからないよう背後で、マットに向かって無駄なく直線的に移動したと読み取れた。マットに乗るために、やや踏ん張る必要があったため、力性は「強度:4」であり、マットに乗ることが目的であったため、時性については、動きは一度しか起きず、「動きの頻度」は単発的と捉えられた。やや高めなマットであったためか、素早くは乗れず、「動きの速さ:3」と捉えられた。保育者の背後で行われたことを考えると、KSにとっては、慌てずにイタズラができる、という思いがあったのかもしれない。</p> <p>②保育者の膝に抱きつくは、再びマットに乗ったKSに対し、A先生がKSをマットから下ろすことを意図して、腕を掴もうとしたところ、KSがA先生の脚に抱きついたもので、直前の行為は「保育者のその子どもに対する指示」と捉えられた。また、「動きの速さ:4」で、A先生がKSをマットから下ろすよりも素早く動き、力性は「強度:5」で脚に抱きつく力は強く、脚に抱きついたまま力を入れて離れないため、時性の「動きの頻度」は持続的と捉えられた。また、「保育者との向き」を対面させ、「姿勢の重心」を前傾にしている。これは、A先生がマットから下ろそうとする動きを察知し、それに対して抵抗しようとして、A先生よりも先に動き出して、脚に抱きついて体重をかけることで、動きを制限しようとする、拒否の動きの表れと読み取れた。</p> <p>③保育者に向けて両腕を挙げるは、KSを抱いていたA先生がKSを下ろしてから立ち上がった、という直前の事象によって起きた動きである。下ろされたことで、KSは両手を上げる際、保育者に対して真っ直ぐ近寄るとい、直線的な「移動の経路」を辿っており、両手を上に伸ばすことで「姿勢の高さ:5(伸長位)」となっていた。また「保育者との向き」は対面しているため、「姿勢の重心」を前傾にすることで、保育者の方に傾けている、と捉えられた。KSの動きが「マットから下りたくない」という拒否から、「抱っこしてほしい」という別の要求に変化したことが、動きから読み取れた。A先生の要求に抵抗したがマットから下ろされたことで、今度は、KSに新たな抱いてほしいという要求へ移ったと考えられた。</p> <p>④の保育者の膝から下りるは、直前の事象が「他児が歌に合わせて王様ポーズをとる」であり、これをきっかけに、「保育者との向き」はA先生の右側になり、さらに「姿勢の重心」を右側に傾けており、それまで抱かれることを要求して密着していたA先生とは、反対の方向に体を傾けることで、自ら離れた動きと捉えられた。このことから、「抱かれない」という要求が一時的に消失し、「保育者から離れて朝の会に参加する」という調整に向かったと読み取れた。また、このように調整に向かったと読み取れたが、KSの興味、他児の「王様ポーズをとる」という動きによって、朝の会へと向いたとは受け取れても、KSが保育者の要求に従って朝の会に参加しようと思った、とは読み取りにくい。むしろ、保育者の「朝の会に参加してもらいたい」という思いと、「王様ポーズをとりたい」という欲求に従って、「朝の会に参加しよう」としたKSの思いが一致したことで、保育者はKSの思いが「調整された」と感じた、と考えられたため、分析シートの「拒否・要求・調整の区分」には、「調整(保育者にとって)」と示した。</p>													

シートを用いたことによって読み取れた内容は、以下の通りである。

- i (①の動きを中心として): 「マットに乗りたい」という自分の欲求を、マットから下ろされること(直前の事象)によって妨げた保育者の行為に対して、KSは、保育者の背後で(保育者との向き)、マットに向かって真っ直ぐに移動し(移動の有無と経路)、マットに乗った。これにより、KSが保育者の要求を理解し、その保育者に見つからないよう行動したと読み取れた。
- ii (②の動きを中心として): KSが、マットから下ろそうとした保育者の脚に抱きついたのは、保育者に抱かれないという要求の動きともとれる。しかし分析シートでは、保育者がKSをマットから下ろすよりも素早く(動きの速さ)動き出し、力強く(強度)脚にしがみ続け(動きの頻度)、保育者に向かって(保育者との向き)、自分の体重をかけている(姿勢の重心)様子が捉えられた。これは、マットから自分を下ろそうとする保育者に先んじて動き出し、保育者に自分の体重をかけることで、自分をマットから下ろそうとする保育者の行為を制限しようとする動きと解釈できた。マットから下りたくないという思いが強まり、保育者に抵抗しようとしたKSの拒

否が読み取れた。

- iii (③の動きを中心として): KSを抱きかかえながら、マットから下ろして立ち上がった保育者の行為に対して、KSは保育者に真っ直ぐに近寄り(移動の有無と経路)、自分の腕を伸ばし伸長位になり(姿勢の高さ)、保育者に向けて体重を傾けている(姿勢の重心)。これは、KSが保育者に抱かれたがっている要求の行為と読み取れ、それまでの「マットから下りたくない」という拒否から、「抱っこしてほしい」という別の要求に変化した様子が読み取れた。
- iv (④の動きを中心として): 他児の王様ポーズをとる行為(直前に起きた事象)の後、KSは、それまで抱かれていた保育者側とは反対の方向に(保育者との向き)、自ら体を傾けて離れた(姿勢の重心)。「抱かれない」という要求が一時的には消失した様子が読み取れた。保育者にはそもそも「朝の会に参加してもらいたい」という思いがあり、KSが保育者のもとを離れ、朝の会に向かったことで、保育者自身も調整の場面と感じ取った様子も見られた。しかし、抱いてくれていた保育者を見ることなく離れる(保育者との向き)KSの動きから、KSの興味、他児に触発される形で(直前に起きた事象)、他児に向いたとも読み取れる。1-2歳児の調整が、当初の拒否や

要求の解決によって生じるだけでなく、むしろ別の要求、言い換えれば新たな欲求によって起こることが示唆された。

(2) 事例2：まだ手洗いたい

事例2は、KSの手洗い場面で、保育者にタオルで手を拭かれたことで起きた拒否の事例である。この事例からは、①体をひねる、②振り向く、③他児を水道へ連れて行く、の3つの身体の動きが抽出できた。シート中に示すように、男児KSの拒否・要求・調整の状況と内面が考察された。分析シートを用いたことによって読み取れた内容は、以下の通りである。

- i (①の動きを中心として)：保育者の、KSの両手を握って水道から離すという要求の行為に対して、KSは上半身全体をひねり身体部位を大きく使い(身体の形態、力性)、素早く動き(動きの速さ)、水道から離れさせようとする保育者の要求する方向とは反対に重心を傾けて(姿勢の重心)、身を屈めている(姿勢の高さ)。保育者に手を握られ自分の動きが制限されているため、からだ全体の動きを使って抵抗する動きが生まれ、それによって拒否の気持ちがいつそう強くなる様子が読み取れた。内面が動きに表れるのと同時に、動くことによって内面(感情)をいつそう高ぶらせていく様子は、1-2歳児の拒否の特徴ではないかと考えられた。
- ii (②の動きを中心として)：保育者に、水道の入り口まで連れてこられたKSは、ゆっくりと(動きの速さ)、弱い(強度)動きで、水道の方へ振り向き、

しばらくそのままであった(動きの頻度)。保育者を振り切って再び水道に向かい、手を洗いたいという拒否と要求の行為には転じないものの、手を洗い終えることには納得し切れていないというKSの思いが読み取れた。

- iii (③の動きを中心として) KSが世話をしたがるTGが来たため(直前の事象)、KSは、TGを水道に連れて行った後、保育者の誘いかけ通り、読み聞かせの場へ向かった。KSはTGの背中をそっと押し(形態、強度)、ゆっくりとした動きで(動きの速さ)、TGの進む方向に沿って真っ直ぐ(移動の経路)移動した。TGの動きに合わせるKSの動きが表れており、KSなりの「大好きなTGに優しくしよう」という思いも読み取れた。また、ゆったりと動いたことが、気持ちを切り替えるきっかけとなり調整に向かったとも解釈でき、1-2歳児の調整が、動きそのものに誘発される場合があると考えられた。

VI. 有効性と課題

本稿では、保育所における1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を身体表現として描き出すために、動きを捉える観点と基準を設定した分析シートを作成し、分析考察を試行した。分析シートの有効性と可能性は以下のようにまとめられる。

第1に、対象児の動きを詳細に分析することによって、対象児の内面を説明できる有効性と、予測する根

シート2

事例2		「まだ手洗いたい」		男児KS		場面:手洗い		2014.07.01						
<p>おやつの前に、水道で手を洗う。男児KSが自分から水道で手を洗い始める。最初に水で手を濡らしてこすり、次に自分でポンプタイプの石鹸をつけて手をこすりうると、C先生が、手を洗うKSの後ろから自分の手を添えながら一緒に洗う。C先生が「Kちゃん、これおしまいよ」と言いながら、タオルで手を拭くために、一緒に洗っていた手を握りながらKSを少し後ろに下がらせてタオルで手を拭くと、①すぐにKSが体をひねる。C先生がKSの両手を握ったままなので、KSは両手を挙げたバンザイのような姿勢になる。C先生は「Kちゃん、楽しい(手を洗い終えた子とA先生が手遊びなどをしている)、始まるって」と言ってKSの手を握って持ち上げると、水道の出入口へ連れて行く。C先生が、他児らと手遊びをしているA先生の方にKSを向け、「Kちゃん、何がある?ちょっと見てきて??」と声をかけてから、握っていた手を離すが、②KSは振り向いて水道の方を見る。そこへ、よくKSがお世話をしたがる、TGが手を洗うため水道に向かって来て、KSとすれ違う格好になる。③KSは、TGを見て、後ろからTGを手で押しながら進み、水道まで連れて行くと、自分からA先生の方に向かう。</p>														
時間	直前に起きた事象	身体の形態		力性	空間性				時性			拒否・要求・調整の区分		
		動き	部位		強度	移動の有無	移動の経路	保育者の向き	姿勢の重心(前後)	姿勢の重心(左右)	姿勢の高さ		くり返しの有無	動きの速さ
00:32-00:39	保育者がタオルで手を拭く	①体をひねる	体幹	4	無	無	後ろ向き	4	C	2	無	4	単発	拒否
00:40-00:47	保育者が手遊びをしている方に誘いかける	②振り向く	頭	2	無	無	後ろ向き	3	C	4	無	1	持続	拒否
00:48-01:00	他児が手を洗いに来る	③他児を水道へ連れて行く	上肢	2	有	直線的	保育者の背後	3	C	4	無	2	単発	調整
考察	<p>①体をひねるは、KSが自ら手を洗い始め、石鹸をつけたところで、C先生が後ろから手を添えて手洗いを補助し、「これおしまいよ」と言いながら、一緒に手を洗っていた流れのまま、KSの手を握りながら後ろに下がると、KSを水道から離し、KSの手をタオルで拭こうとしたことで起きた。これにより、「直前の事象」が、保育者がタオルで手を拭くという、手洗いを終えることを意図した保育者の要求であり、連れて行かれまいと拒否する身体の動きと捉えられた。またその動きは、「身体部位」が体幹であり、上半身全体が大きく動いていた。力性の「強度:4」で、「動きの速さ:4」と捉えられ、動きの変化が素早く起きたことが分かった。時性については、移動はなく、「保育者との向き」は後ろ向きであり、「姿勢の重心」が後方に傾いて、「姿勢の高さ」が立位から座位に近い姿勢になったと捉えられた。これにより、C先生がKSの後ろから手を握って、水道から移動させようとする行為に対して、自分の動きが制限されているため、自分よりも力の強い保育者に対して、からだ全体を使って抵抗する動きが生まれ、それによって拒否の気持ちがいつそう強くなる様子が読み取れた。</p> <p>②振り向くは、「直前の事象」を、C先生がKSを水道の入口まで連れていき、手遊びをしている保育者の方へ行くよう誘いかける行為と捉えた。また振り向く際の動きは、「動きの速さ:1」、「強度:2」であり、ゆっくりとした弱い動きと捉えられた。「動きの頻度」については、振り向いた後は、しばらくそのままの姿勢であり、持続的な動きと捉えられた。重心の変化や移動はなかった。このような、水道の方にゆっくり振り向き、じっとしているという動きから、保育者の誘いかけ(要求)には乗らず、かと言って再び「水道に向かう」といった要求に転じる動きも少ないという、手を洗い終えることには納得しきれないという思いが読み取れた。</p> <p>またこの時、偶然にも、TGが手を洗いに来たのだが、普段から、KSはTGに対して何かと世話をしたがることが多い。この場面では、まだ手を洗いたかったという思いがあったにもかかわらず、③TGを水道へ連れて行き、その後、C先生の誘いかけ通り、A先生の方へ向かっているため、調整の場面として捉えた。TGが水道へ向かう動きに対して、KSのTGの背中を押し動きは、「強度:2」と弱く、「動きの速さ:2」とゆっくりとしており、「移動の経路」は、TGの進行方向と同じ方向へ、直線的に動いたと捉えられた。これにより、KSがTGの動きに合わせて、ゆっくり弱い動きをしていることが分かり、KSなりに「大好きなTGに優しくしよう」という思いが読み取れた。また、それまでのKSの拒否とは、関連のない動きが、KSなりに気持ちを切り替えるきっかけとなったと考えられた。</p>													

拠が得られる可能性が認められた。区別のしにくい拒否と要求の動きがどのように表れているか、行為に合わせて自分の内面が身体の動きにどのように表れるか、拒否・要求から調整へと至る動きの発現の直接的な原因は何かなどの理解が進む。

第2に、同一児の身体の動きの変化を内面の変化として読み取ることができるため、発達的な変化を捉えられる可能性が認められた。

第3に、同じような行為や、いつものこと、何となくそう感じるという保育者の感覚的な捉え方でなく、一定の基準に依拠して身体の動きを描き出すことで、内面の変化や推察の裏付けとなり、保育者が何によってそう感じられたのかを探ることできる可能性がある。また、保育者間の共通理解にも有効に機能し、保育者の支援の見直しにも活用できる可能性が認められた。

しかし、本分析シートを用いる際の留意点として、身体の動きが、直接的に言葉の置き換えではないことを念頭に置く必要がある。法則性を重視しすぎて、事例の具体性を捨象してしまわないように、事例の文脈から切り離さずに解釈するよう努め、1-2歳児の身体の動きを、身体表現として描き、「拒否・要求・調整」行為を焦点とした保育者とのかかわりの実相を分析することを、次の課題としたい。

注

(注1) 保育所保育指針において、乳児保育は特に0歳児の保育を指し、乳児は満1歳に満たない者を指す。しかし日本保育学会では研究領域の区分を、乳児保育(0, 1, 2歳児保育)と表記しており、保育現場でも0-2歳児の保育を乳児保育と称することが多い。また厚生労働省が使用している0-2歳児を表す低年齢児という用語については、保育現場で使われることが少ない。本稿では、保育現場で一般的に用いられる用語に合わせて、乳児保育を0-2歳児クラスまでを含めた保育、乳児を0-2歳児を表す語として使用する。また、本稿で調査対象とする1歳児クラスは、満1歳から2歳10か月までの月齢の子どもが在籍するクラスであることから、その場合は限定的に1-2歳児と表記する。

引用文献

- 1 文部科学省中央教育審議会答申。(2005) 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について
- 2 内田信子編(2006) 発達心理学キーワード。有斐閣。25-32
- 3 名須川知子・高橋敏之編著(2006) 第8章 身体表現活動の発達と表現。保育内容「表現論」。ミネルヴァ書房。111
- 4 名和孝浩(2014) 保育所における1歳児の他者とのかかわりの芽生え—保育士に自分を見てもらうための行為に着目して—。愛知教育大学研究報告。第63輯。55-63
- 5 前掲3。116
- 6 柴真理子(1993) 身体表現—からだ・感じて・生きる—。東京書籍。93-94
- 7 高野牧子(2009) 幼児期の欲求場面における身体表現による母子間のコミュニケーション。山梨県立大学研究紀要Vol. 4。

- 21-29
- 8 石塚雄康(1982) からだとことばのイメージ—身体表現—。青雲書房。9-10
- 9 中田亨(2008) ラバン身体表現理論。知能と情報：日本知能情報ファジイ学会誌。第20巻第1号。132
- 10 ルドルフ・ラバン・神沢和夫訳(1985) 身体運動の習得。白水社。43-45
- 11 朴淳香(1998) 舞踊創作における創作意図の数量的分析。情報処理学会研究報告。人文科学とコンピュータ研究報告。98(97)。1-8
- 12 岩城朱美(1999) ルドルフ・ラバンにおける身体運動の記譜法に関する考察。日本建築学会建築歴史・意匠。561-562
- 13 高橋克己・八村広三郎・吉村ミツ(2005) LMAに基づく舞踊動作の解析・評価。情報処理学会研究報告。人文科学とコンピュータ研究報告。第10巻。9-16
- 14 中田亨・森武俊・佐藤知正(2001) ロボットの身体動作表現と生成される印象とのラバン特徴量を介した定量的相関分析。日本ロボット学会誌。第19巻第2号。104-111
- 15 増田恵・加藤昇平・伊藤英則(2011) ラバン理論に基づいたヒューマンロボット身体動作の動作特徴抽出と表出感情推定。日本感性工学会論文誌。第10巻第2号。295-303
- 16 前掲7。21-29
- 17 高野牧子(2010) 幼児期の感情表現および意識的な身体表現による母子間のコミュニケーション。山梨県立大学人間福祉学部紀要。Vol. 5。17-34
- 18 今井和子(2009) 自我の芽生え—はじめて体験する「人とのぶつかり」。1歳児の育ち事典。小学館。6-9
- 19 川田学・塚田・城みちる・川田暁子(2005) 乳児期における自己主張の発達と母親の対処行動の変容：食事場面における生後5か月から15か月までの縦断研究。発達心理学研究。第16巻。46-58
- 20 前掲18。14-21
- 21 同上。8
- 22 坂上裕子(2002) 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達の変化：一母子における共変課程の検討。発達心理学研究。第13巻。261-273
- 23 高濱裕子・渡辺利子(2006) 母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ：1歳から3歳までの横断研究。お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要。第3巻。1-7
- 24 大河原美以・鈴木廣子・藤岡育恵・殿川佳子・響江史子(2011) 幼児の感情制御の発達不全評価尺度の作成(1)：2歳児における質的データの分析。東京学芸大学紀要総合教育科学系。第62巻第1号。231-240
- 25 村上八千世・根ヶ山光一(2007) 乳幼児のオムツ交換場面における子どもと保育者の対立と調整—家庭と保育所の比較—。保育学研究。第45巻。第2号。19-26
- 26 河原紀子(2004) 食事場面における1-2歳児の拒否行動と保育者の対応：相互交渉パターンの分析から。保育学研究。第42巻。第2号。8-16
- 27 汐見稔幸(1994) 子どもの時間。大月書店。118-120
- 28 西洋子・本山益子・鈴木裕子・吉川京子(2003) 子ども・からだ・表現—豊かな保育内容のための理論と演習—。市村出版。49
- 29 山田洋子(1982) 0-2歳児における要求—拒否と自己の発達。教育心理学研究。第30巻。38-47
- 30 前掲10。46

(2014年9月24日受理)